

ヒンディー語の所有表現再考 — 類型論的観点からの考察 —

今村 泰也

キーワード：ヒンディー語、所有構文、スキーマ、文法化、分離不可能性

要旨

ヒンディー語には英語の *have* のように一義的に所有を表す動詞がない。所有（「X は Y を持っている」）は所有者の格と存在動詞を組み合わせ、「X の近くに Y がある」「X の Y がある」「X に Y がある」「X(の中)に Y がある」のように存在文のパターンを用いて表される。本稿は、これら 4 つの所有表現（所有構文）を言語類型論の観点から Heine (1997a) の理論と枠組みを用いて分析・考察を試みたものである。

ヒンディー語の所有表現の使い分けと文の解釈（存在文／所有文）には分離不可能性や有生性といった特性が関与しており、通言語的な所有の種類との一致が見られる。

本稿では、典型的な分離不可能所有（親族、身体部分）において所有者が主題化していることを指摘した。また、Heine (1997a) が挙げている 7 種の所有概念のうち、ヒンディー語では無生物分離可能所有を表すことができないことを明らかにした。

1. はじめに¹

所有 (possession) は普遍的な領域であり、いかなる人間言語も慣習化した所有表現を持っていることが予測できる (Heine 1997a: 1)。例えば英語では *have* 動詞による所有表現があり²、日本語では所有物の属性によって「X は Y がある」「X は Y をしている」「X は Y を持っている」などの表現がある³。ヒンディー語 (Hindi)⁴の場合、いわゆる *have* 動詞はなく、所有表現には存在を表す動詞が用いられる。その際、所有者 X は所有物 Y の属性あるいは Y との関係によって異なる格で標示される。

ヒンディー語の所有表現の分類と使用条件は先行研究でほぼ明らかにされているが、言語類型論の観点からヒンディー語の所有表現を考察した研究は少ない。ヒンディー語における複数の所有表現の併用とそこに見られる文法現象は類型論的にどのように分析できるのかというのが本稿の目的である。

Heine (1997a) は世界の言語の所有表現を包括的に扱った研究であり、本研究は Heine (1997a) の文法化の仮説と枠組みに基づいて行う。

本稿の構成は次の通りである。まず、2 節で本研究の前提となる Heine (1997a) の所

有表現と所有概念の類型を概観する。3節ではこの Heine (1997a) の枠組みに基づき、ヒンディー語の4つの所有表現を分析・考察する。4節で本研究のまとめを行う。

2. 所有表現の類型

2.1 所有表現の種類と叙述所有の起点

所有表現は、限定所有 (Attributive possession) と叙述所有 (Predicative possession) に大別され、叙述所有はさらに所有構文 ('have'-constructions) と所属構文 ('belong'-constructions) に分けられる。

- (1) 限定所有 例: 'Ron's dog'
 叙述所有
 a. 所有構文 例: 'Ron has a dog.'
 b. 所属構文 例: 'The dog is Ron's.' (Heine 1997b: 87)

Heine (1997a) は世界の言語における所有表現、とりわけ所有構文を詳細に論じている。本研究の考察対象はヒンディー語の所有構文である。本稿で「所有表現」と言うとき、上記(1)のうちの所有構文を指して言うものとする。

Heine (1997a: 45) は、所有は抽象的な概念領域であり、その表現はより具体的な領域から派生したものであるとし、その発展を文法化 (grammaticalization)⁵ 理論で説明している。そして、その文法化の起点 (source) に以下の8つのイベント・スキーマ (event schema) を設定している⁶ (下表1: Xは所有者、Yは所有物を表す)。

表1 叙述所有表現に用いられるスキーマ (Heine (1997a: 47) を一部改変)

<i>Label of event schema</i>	<i>Formula</i>
(i) Action Schema	X takes Y
(ii) Location Schema	Y is located at X
(iii) Companion Schema	X is with Y
Existence Schema	Y exists with reference to X
(iv) Genitive Schema	X's Y exists
(v) Goal Schema	Y exists for/to X
(vi) Topic Schema	As for X, Y exists
(vii) Source Schema	Y exists from X
(viii) Equation Schema	Y is X's (property)

各スキーマについて簡単な説明を加えておく。

Action Schema は 'take'、'seize'、'grab'、'catch' などの動作動詞を使う型で、その発展のプロセスは、X takes Y > X has, owns Y のように記述できる。英語をはじめ、多く

のヨーロッパの言語が Action Schema を用いて所有を表す⁷。

Location Schema はコピュラ動詞や状態動詞 ('be at', 'stay', 'sit', etc.) を用いる型で、所有物 Y は主語、所有者 X は所格補語 (locative complement) としてコード化される。

Companion (or Accompaniment) Schema では所有物は所有者の一種の付随物として概念化される。

Existence Schema は存在動詞を用いる型で、Genitive、Goal、Topic の3つの下位スキーマがある。所有者は、Genitive Schema では所有物の属格修飾語 (genitival modifier) としてコード化され、Goal Schema では与格／受益格／目標格でコード化される。Topic Schema では文の主題として表される。

Source Schema では所有者は 'from'、'off'、'out of' のような奪格の参与者として表される。

Equation Schema は他のスキーマと異なり、常に所属構文 ('belong'-constructions) に関係する。

Heine (1997a) がサンプルとした 100 言語中、Location Schema と Goal Schema を使用する言語が多く (23+22=45 言語)、以下、Genitive Schema (16 言語)、Action Schema (15 言語)、Companion Schema (14 言語) の順に続く。地域的な特徴としては、Goal Schema の使用は特にアジアの言語に顕著で、Companion Schema はアフリカの言語でよく使用される。

2.2 所有概念

Heine (1997a: 33-35) は通言語的・通文化的に区別されやすい所有概念 (possessive notions) として以下の7つを挙げている。

① 物理的所有 (Physical possession (PHYS))

当該時点において所有者と所有物が物理的に相互に関係している。

(2) I want to fill in this form; do you have a pen?

② 一時的所有 (Temporary possession (TEMP))

所有者は一定期間、所有物を自由に使用することができるが、その所有権を主張できない。

(3) I have a car that I use to go to the office but it belongs to Judy.

③ 永続的所有 (Permanent possession (PERM))

所有物は所有者の財産 (property) であり、一般に所有者は所有物に対する法的な所有権 (legal title) を持つ。

(4) Judy has a car but I use it all the time.

④ 分離不可能所有 (Inalienable possession (INAL))

所有物は身体部分や親族のように一般に所有者から分離できない (inseparable) と考えられる⁸。

(5) I have blue eyes / two sisters.

⑤ 抽象的所有 (Abstract possession (ABST))

所有物は病気や感覚、心理状態など、目に見えない無形の概念である。

(6) He has no time / no mercy.

⑥ 無生物分離不可能所有 (Inanimate inalienable possession (IN/I))

しばしば、部分・全体の関係と呼ばれるが、所有者が無生物という点で分離不可能所有 (INAL) と異なる。所有物と所有者は分離不可能と考えられる。

(7) That tree has few branches.

My study has three windows.

⑦ 無生物分離可能所有 (Inanimate alienable possession (IN/A))

所有者は無生物で所有物は所有者から分離できる。

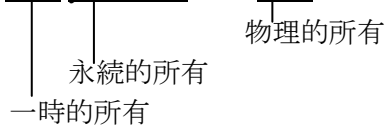
(8) That tree has crows on it.

My study has a lot of useless books in it.⁹

英語では上記の概念すべてが have あるいは属格を用いて表される。次例(9)には3つの異なる所有概念が表れている。

(9) I have your book but I have it at home.

(Heine 1997a: 35)



しかし、所有概念によって所有表現を使い分けている言語もあり、ヒンディー語もそうした言語の一つである。

Heine (1997a: 39-40) はさらに、上の7種の所有概念を下記 I-V の「所有のプロトタイプ特性」に照らし、最もプロトタイプ的な所有は「永続的所有」であり (I-V の5項目すべてに該当)、次に「物理的所有」「一時的所有」「分離不可能所有」(4~5項目に該当)、その次に「抽象的所有」「無生物分離不可能所有」「無生物分離可能所有」(2~3項目に

該当) と 3 段階に分類している。

- I 所有者は人間である。
- II 所有物は具体物である。
- III 所有者は所有物を使用する権利を持つ。
- IV 所有者と所有物は空間的に近接している。
- V 所有には時間的制限が考えられない。

表 2 所有概念のプロトタイプ特性 (Heine 1997a: 39)

	PHYS	TEMP	PERM	INAL	ABST	IN/I	IN/I
I	+	+	+	+	+	-	-
II	+	+	+	+	-	+	+
III	+	+	+	+/-	-	-	-
IV	+	+	+	+/-	+	+	+
V	-	-	+	+	+/-	+	-

以上、本節では Heine (1997a) による所有表現と所有概念の類型を概観した。次節ではこの枠組みに基づき、ヒンディー語の所有表現を分析・考察する。

3. ヒンディー語の所有表現

3.1 先行研究

ヒンディー語の所有表現に関する主要な記述および研究としては、Bendix (1966)、Kachru (1969; 1980; 1991)、Hook (1979)、Sinha (1986)、Mohanani (1994)、McGregor (1995)、Verma (1997)、高橋 (2003)、Montaut (2004)、Agnihotri (2007) などがある。また、類型論的な研究としては、Masica (1976; 1991)、Freeze (1992)¹⁰ がある。これらの先行研究に基づいてヒンディー語の所有表現の特徴をまとめると、大要、以下のようになる。

- ① ヒンディー語には所有の have 動詞がなく、所有を表現するには存在を表す動詞を用いる。
- ② 所有者 X は所有物 Y の属性あるいは Y との関係によって所格、与格、属格のいずれかをとる。
- ③ Y が本来的に自分に属していない具体物の場合 (例：本、お金、車)、X は所格をとり、「X の近くに Y がある」という構文で所有を表す。
- ④ Y が身体部分や親族など X と密接不可分なものの場合、X は属格をとる (「X の Y がある」)。
- ⑤ Y が抽象物の場合 (例：疑い、時間、権利)、X は与格をとる (「X に Y がある」)。

ヒンディー語には少なくとも上記③④⑤の3つの所有構文が認められ(さらにもう一つあるが、それについては後述する)、それぞれ、Heine (1997a) の Location Schema (Y is located at X)、Genitive Schema (X's Y exists)、Goal Schema (Y exists for/to X) に該当する。本稿は基本的にこれらの先行研究に依拠した上で、類型論的観点からヒンディー語の所有構文を考察する。

Heine (1997a) の付録 (A world-wide survey of 'have'-constructions) にはHeineが調査した100言語のリストとその主要スキーマが挙げられており、ヒンディー語の主要スキーマはLocation Schemaとなっている。また、WALS (The World Atlas of Language Structures) Onlineでもヒンディー語はLocationalに分類されている¹¹。

以下、各所有構文について具体的な用例を挙げながら、その特徴および文法現象を見ていく。

3.2 所格所有 I <X ke paas Y honaa>

(10) X ke paas Y honaa

「Xの近くにYがある > XはYを持っている」 (Location Schema)

これは、人がものを所有あるいは所持していることを表すヒンディー語における普通の所有構文である。所有物が分離可能(移動可能)な具体物の場合に用いられる。

(11) rames=ke paas do kaarē hāi.

ラメーシュ=LOC 二 車.F.PL 存在する.PRS.3PL

「ラメーシュの近くに二台の車がある > ラメーシュは車を二台持っている」

(Kachru 1980: 122)

ke paas は、属格後置詞 kaa の変化形 ke (詳細は後述) と paas (近く;そば) を組み合わせた複合後置詞(～の近くに)である。所格所有では、所有者 X は所格補語、所有物 Y は主語としてコード化される。ヒンディー語には一致 (agreement) があるが、存在動詞 honaa は統語上の主語である Y (上例では kaarē (車.F.PL)) の人称・性・数に一致する¹²。

(12) kyaa kisii=ke paas maacis hai?

Q 誰か=LOC マッチ.M.SG 存在する.PRS.3SG

「誰かの近くにマッチがあるか > 誰かマッチを持っているか」 (Hook 1979: 79)

(13) us=ke paas qalam hai lekin us=kaa nahī

3SG=LOC ペン.M.SG 存在する.PRS.3SG しかし 3SG=GEN.M.SG NEG

hai.

COP.PRS.3SG

「彼はペンを持っているが、彼のではない」

(Bendix 1966: 100)

上記 3 例の所有物（「車」「マッチ」「ペン」）はいずれも分離可能な所有物である。Heine (1997a) の所有概念の類型に照らすと、(11)は所有権のある永続的所有、(12)は物理的所有、(13)は一時的所有に該当する¹³（各構文が表す所有概念を4節の表3にまとめた。例文とともに適宜参照されたい）。

所有者が1人称/2人称代名詞の場合、一語で X ke に相当する属格形が使われる¹⁴。

- (14) mere paas bāik=mē bahut kam pūjii jamaa
 1SG.GEN 近く.OBL 銀行=LOC とても 少ない 貯金.F.SG 財.F.SG
 hai.
 存在する.PRS.3SG
 「私の銀行口座にはほんのわずかしかな貯蓄はない」 (HJD08381)

上例(14)には ke paas (ここでは mere paas) の他に所格名詞句 bāik mē (銀行に) があらわれている。この例から明らかのように、<X ke paas Y honaa> は所有物が文字通り「所有者の近くに」なくても使うことができる。つまり、<X ke paas Y honaa> は ke paas の意味が希薄化し (semantic bleaching)、文法化した所有構文になっている。ただし、文法化の起点の用法が消失したわけではなく、X が無生物の場合、文字通り「X の近くに Y がある」という意味になる (次例(15))。

- (15) mere ghar=ke paas hoTal hai
 1SG.GEN 家.M.SG=LOC ホテル.M.SG 存在する.PRS.3SG
 「私の家の近くにホテルがある」 (田中・町田 1986: 45)

<X ke paas Y honaa> は上述のように、所有物が分離可能 (移動可能) な具体物の場合に用いられるが、土地・建物や抽象物の所有にも用いられる (次例(16)-(19))。

- (16) us=ke paas do biighaa zamiin th-ii.
 3SG=LOC 二 ビーガー 土地.F.SG 存在する.PST-F.SG
 「彼は2ビーガー (約 5000 m²) の土地を所有していた」 (HJD0819r)
- (17) mere paas vaqt nahī hai.
 1SG.GEN 近く.OBL 時間.M.SG NEG 存在する.PRS.3SG
 「私は時間がない」 (McGregor 1995: 55)
- (18) ciin=ke paas surakSaa pariSad=mē viiTo adhikaar hai...
 中国=LOC 国連安全保障理事会=LOC 拒否権.M.SG 存在する.PRS.3SG
 「中国は国連安全保障理事会において拒否権を持っている」 (BBC060126)
- (19) ve=bhii ek insaan hāī. un=ke paas xudaa=kii śakti nahī
 3PL=も 一 人間 COP.PRS.3PL 3PL=LOC 神=GEN.F 力.F NEG
 hai.
 存在する.PRS.3SG

「あの方も一人の人間です。神の力をお持ちではありません¹⁵」 (BBC051216)

上例(16)は属格所有 (3.3 節)、(17)-(18)は与格所有 (3.4 節)、(19)は所格所有 II (3.5 節) で表すのが標準的であるが、実際には所格所有 I もよく用いられる。このことから、所格所有 I <X ke paas Y honaa> はヒンディー語の普通の所有表現として、使用が拡張している (構文が表す所有概念が拡張している) と考えられる。しかし、所格所有 I は典型的な分離不可能所有 (親族、身体部分) と無生物所有¹⁶に用いることはできず (X が無生物の場合、上例(15)のように所有表現ではなく存在表現になる)、7 種の所有概念 (2.2 節) すべてをカバーする所有表現にはなっていない。

3.3 属格所有 <X kaa Y honaa>

(20) X kaa Y honaa

「X の Y がある > X は Y を持っている」 (Genitive Schema)

多くの言語で Genitive Schema は分離不可能所有を表す主要な手段になり、一方、分離可能所有は他のスキーマで表される (Heine 1997a: 67)。この通言語的な傾向はヒンディー語にもあてはまる。属格所有では、所有者 X は所有物 Y の属格修飾語としてコード化され、「X の Y がある」という構文で所有が表される¹⁷。

(21) raam=**kaa** ek beTaa hai.

ラーム=GEN.M.SG 一 息子.M.SG 存在する.PRS.3SG

「ラームの一人の息子がいる > ラームには息子が一人いる」 (Mohanani 1994: 177)

(22) us kutte=**kii** baRii lambii pūuc hai.

その 犬=GEN.F とても 長い 尻尾.F.SG 存在する.PRS.3SG

「その犬のとても長い尻尾がある > その犬はとても長い尻尾を持っている」

(高橋 2003: 53)

属格後置詞 kaa (または代名詞属格形) は所有物 Y の性・数・格に一致する¹⁸ (上例(21)では beTaa (息子.M.SG) に、(22)では pūuc (尻尾.F.SG) に一致している)。所有物 Y は統語上の主語であり、存在動詞 honaa は所格所有 I の場合と同様、Y に一致する。

属格所有は親族や身体部分の所有だけでなく、所有者と密接不可分なものの所有や部分・全体の関係 (無生物分離不可能所有) などにも用いられる (次例(23)-(27))。

(23) māi zamīdaar hūū. paas=ke gāāv=mē merii caar
1SG 地主 COP.PRS.1SG 近く=GEN.M.OBL 村=LOC 1SG.GEN.F 四
ekaR zamiin hai.

エーカー 土地.F.SG 存在する.PRS.3SG

「私は地主だ。近くの村に四エーカーの土地を持っている」

(M. Rakesh, *Vasna ki Chhaya men*: 222)

- (24) un=**ke** 33 mukhya devtaa th-e un=**mē** pramukh
 3PL=GEN.M.PL 三十三 主な 神.M 存在する.PST-M.PL 3PL=LOC 最高の
 evā śaktīsaalii devtaa indra th-e...
 そして 力の強い 神.M インドラ神 COP.PST-M.PL
 「彼ら(アーリア人)は三十三の主神を有し、そのうち最高で強力な神はインドラ神だった」

(G. Vas, *Kahani Bharat ki--Bachchon ke lie*: 22)

- (25) “pr̥thvii grah=**mē**,” bhuugolśaastrii=**ne** uttar diyaa, “us=**kii** acchii
 地球 惑星=LOC 地理学者=ERG 答える.PFV.M.SG 3SG=GEN.F 良い
 khyaati hai...”¹⁹
 評判.F.SG 存在する.PRS.3SG
 仏語原文: ‘La planète Terre, lui répondit le géographe. Elle a une bonne réputation...’
 『地球という惑星がいいよ』と地理学者は答えた。『地球は評判がいいし……』

(*Chhota Rajkumar* (星の王子さま): 73 (XV))

- (26) is kursii=**ke** tiin=**hii** pair hāī.
 この 椅子=GEN.M.PL 三=だけ 脚.M.PL 存在する.PRS.3PL
 「この椅子は脚が三本しかない」 (Hook 1979: 81)
- (27) diivaar=**ke**=bhii kaan ho-te hāī.
 壁=GEN.M.PL=も 耳.M.PL 存在する-IMPF.M.PL AUX.PRS.3PL
 「壁に耳あり」(ことわざ) (Tiwari 1985: 626)

上例(23)は所有物が土地の例であるが、建物(家、店、病院、工場など)の場合にも属格所有が使われる(言語によっては土地や家も分離不可能として扱われる。注8参照)。

所有物が親族(上例(21))や師弟(次例(28))、友人((29))の場合には属格所有が使われるが、使用人((30))の場合には所格所有 I <X ke paas Y honaa> が使われる。

- (28) aap=**ke** kitne chaatra hāī?
 2PL.HON=GEN.M.PL どれだけの 生徒;弟子.M.PL 存在する.PRS.3PL
 「あなたは何人の生徒がいますか」 (Bhatt 2007: 116)
- (29) un=**ke** kii mitra hāī.
 3PL=GEN.M.PL たくさんの 友達.M.PL 存在する.PRS.3PL
 「彼らはたくさん友達がいる」 (Kumar 1997: 38)
- (30) śrii śarmaa=**ke paas** mahrii, aayaa aur maalii th-e.
 HON シャルマー=LOC 使用人.F.SG 子守.F.SG と 庭師.M.SG 存在する.PST-M.PL
 「シャルマー氏のところには使用人、子守、庭師がいた」 (Hook 1979: 79)

この現象について Kachru (1980: 122) は、(所格所有 I が)「身分の低い雇用者 (low-level employees)」に対して使われると述べ、Sinha (1986: 133) も「+人間」「-身分」の属性

を持つ所有物に対して使われるとしている。しかし、所格所有 I が使われる他の例を考えた場合、身分ではなく、分離不可能性 (inalienability) で説明するのが適切である。つまり、親族をはじめ、師弟や友人などの人間関係は「切っても切れない関係」(分離不可能) であるのに対し、主人と使用人の関係は分離可能な (一時的な) 雇用関係であるからである。

次例のミニマルペアの意味の違いにも分離不可能性が関与している。それぞれ上段(a)が所格所有 I、下段(b)が属格所有である。

- (31) a. **mere paas koi laRkaa nahī hai.** <分離可能>
 1SG.GEN 近く.OBL INDEF 男の子.M.SG NEG 存在する.PRS.3SG
 「私のところには(使用人の)男の子がいない」
- b. **meraa koi laRkaa nahī hai.** <分離不可能>
 1SG.GEN.M.SG INDEF 男の子.M.SG NEG 存在する.PRS.3SG
 「私には息子がいない」 (Verma 1997: 116 を改変)
- (32) a. **us=ke paas bahut-sii pustakē hāī.** <分離可能>
 3SG=LOC 多くの-EMPH 本.F.PL 存在する.PRS.3PL
 「彼はたくさん本を持っている」
- b. **us=kii bahut-sii pustakē hāī.** <分離不可能>
 3SG=GEN.F 多くの-EMPH 本.F.PL 存在する.PRS.3PL
 「彼は多くの著作がある²⁰」 (Bendix 1966: 147 を一部改変)

角田 (1991: 119) は分離不可能所有と分離可能所有の分類を精密化した「所有傾斜」(所有物の階層) を提案している。

(33) 所有傾斜²¹ :

身体部分 > 属性 > 衣類 > (親族) > 愛玩動物 > 作品 > その他の所有物

この階層がそのままヒンディー語に適合するわけではないが、属格所有と所格所有 I の使い分けとの相関が見られる ((21)は親族、(22)は身体部分、(32b)は作品に該当)。

属格所有はさらに、以下のような抽象的所有にも使われる。

- (34) **meraa kal jaa-ne=kaa iraadaa th-aa.**
 1SG.GEN.M.SG 明日 行く-INF.OBL=GEN.M.SG 意図.M.SG 存在する.PST-M.SG
 「私は明日、行くつもりだった」 (Montaut 2004: 201)
- (35) **haRappaa=ke logō=kaa sumer=ke logō=se vyaapaar sampark th-aa.**
 ハラッパ=GEN 人々=GEN.M.SG シュメール=GEN 人々=INST 交易 関係.M.SG
 存在する.PST-M.SG
 「ハラッパの人々はシュメールの人々と交易関係があった」 (HJD12921)

- (36) hamaarii puraaN kathaãð=mě haathii=**kaa** višeS mahatva
 1PL.GEN.F プラーナ 物語.F.PL=LOC 象.M.SG=GEN.M.SG 特別な 重要性.M.SG
 hai.
 存在する.PRS.3SG
 「私達のプラーナ²²に伝えられる話において象は特別な重要性を持つ」

(Nandan 2008 (10): 59)

前者 2 例は属格修飾語と所有物がやや離れているが、(34)の代名詞属格 *meraa* は *iraadaa* (意図) を、(35)の属格後置詞 *kaa* は *sampark* (関係) を修飾している (性・数・格が一致している)。

属格所有構文では上述のように属格後置詞および代名詞属格形は所有物に一致して変化する。しかし、所有物が親族や身体部分の場合 (特に口語では)、この一致関係がなくなる現象が見られる²³。

- (37) ek raajaa th-aa. us=**ke** do raaniyãã th-ñi...
 一 王.M.SG 存在する.PST-M.SG 3SG=GEN.M.OBL 二 王妃.F.PL 存在する.PST-F.PL
 baRii raanii=**ke** saat laRke th-e,
 年上の 王妃.F.SG=GEN.M.OBL 七 男の子.M.PL 存在する.PST-M.PL
 choTii raanii=**ke** koi laRkaa nahñi th-aa.
 年下の 王妃.F.SG=GEN.M.OBL INDEF 男の子.M.SG NEG 存在する.PST-M.SG
 「一人の王様がいた。王様には王妃が二人いた。年上の王妃には七人の王子がいたが、
 年下の王妃には一人もいなかった」 (坂田 1999: 144)
- (38) us gaay=**ke** ek=hii sñg hai.
 あの 牛.F.SG=GEN.M.OBL 一=だけ 角.M.SG 存在する.PRS.3SG
 「あの牛は一本しか角がない」 (Jain 2000: 84)

上例で属格後置詞 *kaa* はすべて *ke* という形をとっている。*ke* は *kaa* の男性・斜格形で、先行研究では「不変化の属格」(invariant Genitives (Masica 1991: 360))、「不変化の *ke*」(invariant *ke* (Agnihotri 2007: 189)) と呼ばれている。上例(37)の一つ目の *ke* は *raaniyãã* (王妃.F.PL) に一致させて *kii* (F.SG/PL) とし、3つ目の *ke* は *laRkaa* (男の子.M.SG) に一致させて *kaa* (M.SG) とするのが文法的である²⁴ ((38)についても同様に *kaa* (M.SG) とするのが文法的)。しかし、上例のように典型的な属格所有では属格後置詞 (または代名詞属格形) と所有物の一致関係がなくなり、所有者の格標識の固定化が見られる²⁵。この現象は属格所有 <X *kaa* Y honaa> (X's Y exists > X has Y) のさらなる文法化現象と考えられる。存在動詞 *honaa* は所有物 Y に一致することから、所有者 X は統語上の主語ではない。しかしながら、所有者 X は所有物 Y の属格修飾語ではなくなっており (Y との一致関係がない)、(39)のように主題化 (topicalization) していると考えられる²⁶。この場合、<X **ke** Y honaa> に存在文/所有文の両義性はなく、一義的に所有文の解釈を受ける。

(39) [X kaa Y] honaa (存在文/所有文)

↓

[X ke] [Y] honaa (所有文)

3.4 与格所有 <X ko Y honaa>

(40) X ko Y honaa

「XにYがある > XはYを持っている」 (Goal Schema)

与格構文の使用は南アジアの言語に顕著で、ヒンディー語では知覚、認識、経験、感情などの表現に与格構文が用いられる²⁷。この与格構文を用いた所有表現 <X ko Y honaa> について高橋 (2003: 53) は、「人が自らの意志や理性によって制御できない生理的、身体的、また心理的な何らかの状態を「経験」する時、その経験をやる側は与格の後置詞 ko を従え、経験される状態が名詞で表わされ、存在動詞がそれに続くことになる」と述べている。以下、与格所有の例を挙げる。

(41) mujh=**ko** {sardii / buxaar / sardard} hai.

1SG=DAT 風邪.F.SG 熱.M.SG 頭痛.M.SG 存在する.PRS.3SG

「私は風邪を引いている/熱がある/頭痛がする」

(Verma 1997: 117)

(42) use apne paRosii=par sandeh th-aa.

3SG.DAT REFL.GEN 隣人.M=に対して 疑い.M.SG 存在する.PST-M.SG

「彼に隣人に対する疑いがあった > 彼は隣人を疑っていた」

(HJD12911)

上例から与格所有は Heine (1997a) の抽象的所有 (所有物は病気や感覚、心理状態など、目に見えない無形の概念) に該当する。与格所有には以下のような例も見られるが、いずれも抽象的所有でまとめることができる。

(43) hamē samay nahī hai.

1PL.DAT 時間.M.SG NEG 存在する.PRS.3SG

「私達は時間がない」

(McGregor 1995: 55)

(44) sanvidhaan=mē harek=**ko** rozgaar=kii chuuT hai.

憲法.M.SG=LOC 皆=DAT 職業.M.SG=GEN.F 自由.F.SG 存在する.PRS.3SG

「憲法では万人が職業選択の自由を有する」

(HJD11651)

(45) hamē pagRii pahan-ne=kaa adhikaar hai.

1PL.DAT ターバン.F.SG 着用する-INF.OBL=GEN.M.SG 権利.M.SG 存在する.PRS.3SG

「我々にはターバンを着用する権利がある²⁸」

(BBC040102)

(46) ghuum-ne=kii mujhe aadat hai.

散歩する-INF.OBL=GEN.F 1SG.DAT 習慣.F.SG 存在する.PRS.3SG

「私に散歩する習慣がある > 私は散歩を習慣にしている」

(B. Sahni, *Jhutputa*: 53)

与格所有は具体物の所有 (PHYS, TEMP, PERM) や無生物所有 (IN/I, IN/A) には使われない。分離不可能所有にも通常使われないが、高橋 (2003: 53) は非標準的な例とことわったうえで、次例(47)を挙げている。

- (47) ek putrii th-ii ham=ko.
 一 娘.F.SG 存在する.PST-F.SG 1PL=DAT
 「私たちには娘が一人いた」 (高橋 2003: 53)

3.5 所格所有 II <X mẽ Y honaa>

- (48) X mẽ Y honaa
 「X(の中)に Y がある > X は Y を持っている」 (Location Schema)

mẽ は英語の in に相当する所格後置詞で、<X mẽ Y honaa> は普通、存在構文 (場所 X に Y がある/いる) として用いられる。所格所有 I <X ke paas Y honaa> がヒンディー語の普通の所有表現として広く使われることは3.2 節で見たとおりであるが、所格所有 II <X mẽ Y honaa> は本質的に、「何かがあるものの内部に存在する」ことを示し (高橋 2003: 52)、人 (または有生物) が持つ固有の特質や特性 (inherent qualities/properties) を表す²⁹。以下、所格所有 II の例を示す (英語と対照するため英訳も示した)。

- (49) raaju=mẽ baRaa dhairya hai.
 ラージュ=LOC 大きな 忍耐力.M.SG 存在する.PRS.3SG
 ‘Raju has great patience.’
 「ラージュの中に大きな忍耐力がある > ラージュはとても忍耐強い」 (Kachru 1980: 122)

- (50) is laRke=mẽ kaafii kharaabiyã=bhii hãĩ,
 この 少年.M.SG=LOC 多くの 欠点.F.PL=も 存在する.PRS.3PL
 acchaaiyã=bhii hãĩ.
 長所.F.PL=も 存在する.PRS.3PL
 ‘This boy has many defects, and qualities too.’
 「この少年にはたくさんの短所もあれば、長所もある」 (Montaut 2004: 205)

- (51) haathiyõ=mẽ baRii taaqat ho-tii hai.
 象.M.PL=LOC 大きな 力.F.SG 存在する-IMPF.F AUX.PRS.3SG
 ‘Elephants have great strength.’
 「象はとても力持ちだ」 (Hook 1979: 81)

すでに述べた所格所有 I、属格所有、与格所有はすべての先行研究で所有構文として扱われているが、所格所有 II <X mẽ Y honaa> については記述がないものもあり、前者 3 構文ほど所有構文として認められていない。しかし、所格所有 II は、(i) X が人間 (ま

たは有生物)である、(ii) Yが特定の所有物(所有者の特質や特性)である、(iii) Heine (1997a)が示した所有のプロトタイプ特性(2.2節)の2~3項目(I, IV, V)に該当する、(iv)次例(52)のように再帰化(reflexivization)と同一名詞句削除(equi-NP deletion)³⁰をコントロールし、Xが主語特性を示すことから、本稿ではこれらを存在文ではなく所有文として扱う。

- (52) viireś=**mē** [apne pitaa=ke saamne aa-ne=kii]
 ヴィーレーシュ=LOC REFL.GEN 父親=GEN 正面に 来る-INF.OBL=GEN.F
 himmat nahī hai.
 勇気.F.SG NEG 存在する.PRS.3SG
 ‘Viresh does not have the courage to face his father.’
 「ヴィーレーシュは父親に面と向かう勇気がなかった」 (Kachru 1991: 62)

上例の所有物はいずれも目に見えない無形の概念であり、抽象的所有に該当するが、所有者に内在する特質・特性であることから(この点で与格所有と異なる)分離不可能所有にも該当し、両方の側面を持っている(次節の表3では両方‘+’でマークした)³¹。

以下の用例については所有文ではなく存在文として扱う。

- (53) kamre=**mē** do khiRkiyāā th-ī.
 部屋=LOC 二 窓.F.PL 存在する.PST-F.PL
 ‘The room had two windows. / There were two windows in the room.’
 「部屋には窓が二つあった」 (Masica 1991: 359)

- (54) is kamre=**mē** bahut kabaaRaa hai.
 この 部屋=LOC 多くの ごみ;がらくた.M.SG 存在する.PRS.3SG
 ‘This room has a lot of junk in it. / There is a lot of junk in this room.’
 「この部屋にはがらくたがたくさんある」 (Verma 1997: 117)

英語では上例(53)-(54)のような文を have 動詞と there 構文の両方で表すことができる。ヒンディー語では、(53)は存在文の解釈を受け、所有文として表す場合には属格所有を用いる(無生物分離不可能所有。次例(55)。(26)-(27)も参照)。(54)も存在文の解釈を受ける。この文のように X と Y の関係が部分・全体あるいは不可分の関係ではない場合、ヒンディー語では所有文として表すことができない(したがって(56)は非文になる)。

- (55) kamre=**kii** do khiRkiyāā th-ī.
 部屋=GEN.F 二 窓.F.PL 存在する.PST-F.PL
 ‘The room had two windows.’
 (56) *is kamre=**kaa** bahut kabaaRaa hai.
 この 部屋=GEN.M.SG 多くの ごみ;がらくた.M.SG 存在する.PRS.3SG
 ‘This room has a lot of junk in it.’

4. まとめ

本稿では Heine (1997a) の文法化の仮説および所有表現と所有概念の類型に基づき、ヒンディー語の4つの所有構文を分析・考察した。その結果は表3のようにまとめられる。

表3 ヒンディー語の所有構文とそれが表す所有概念

Construction	Source Schema	Kind of possession							
		PHYS	TEMP	PERM	INAL		ABST	IN/I	IN/A
					TP	N-TP			
ke paas - honaa	Location	+	+	+	-	(+)	(+)	-	-
kaa - honaa	Genitive	-	-	-	+	+	(+)	+	-
ko - honaa	Goal	-	-	-	-	-	+	-	-
mẽ - honaa	Location	-	-	-	-	+	+	-	-

*TP=典型(親族、身体部分)、N-TP=非典型、(+)=使用の拡張を表す。

表3 から次のことが言える。

- ① 7種の所有概念のうち、分離可能な具体物の所有 (PHYS, TEMP, PERM) は所格所有 I <X ke paas Y honaa> で表される ('+'マーク)。
- ② 分離不可能所有 (INAL, IN/I) は属格所有 <X kaa Y honaa> で表される ('+'マーク)。
- ③ 抽象的所有 (ABST) は与格所有 <X ko Y honaa> で表される ('+'マーク)。
- ④ ヒンディー語では無生物分離可能所有 (IN/A) を表すことができない ('-'マーク)。
- ⑤ 具体物の所有から抽象物の所有へ、構文の使用が拡張している ('(+)'マーク)。

(i) 所格所有 I <X ke paas Y honaa> PHYS, TEMP, PERM > INAL (N-TP), ABST

(ii) 属格所有 <X kaa Y honaa> INAL, IN/I > ABST

Heine (1997a: 233) によれば、Location Schema に基づく構文の所有概念は、PHYS > TEMP > PERM > INAL, ABST の方向へ発達すると予測され、ヒンディー語の場合もこれに一致している (ただし、所格所有 I は典型的な分離不可能所有には使用されない)。

所格所有 II <X mẽ Y honaa> が表す所有概念 (分離不可能かつ抽象的) は属格所有、与格所有が表す所有概念と重なるが、所有物 (抽象名詞) の種類が異なる (所格所有 II の所有物は所有者に内在する特質・特性)。

以上のことから、ヒンディー語の4つの所有構文とそれが表す所有概念は概ね相補分布していると言える。しかしながら、使用の拡張 (上記⑤) によって、結果的に4構文すべてが抽象的所有に使用されることになり、今後、所有物 (抽象名詞) の種類と各構文の使い分けに関してさらに詳しい分析が必要である (先行研究でも明らかにされていない)。

ここで、一言語内に複数の所有構文が併存していることについて一言触れておきたい。所有の文法化研究で得られた知見に基づけば、ヒンディー語の所有構文の発達において、分離不可能所有に使われる属格所有と抽象的所有に使われる与格所有が歴史的に古く、分離可能所有に使われる所格所有 I は後発の新しい構文と考えられる³²。また、表3における‘+’の分布および‘+’と‘(+)’の重なりは連続的な文法化の共時的結果（重層化）と見ることができる³³。

以下は本稿の記述のまとめである。

ヒンディー語にはいわゆる have 動詞はなく、所有は存在動詞を用いて表される。その際、所有者 X は所有物 Y の属性あるいは Y との関係によって異なる格で標示される。

まず、分離可能な具体物の所有 (PHYS, TEMP, PERM) には所格所有 I <X ke paas Y honaa> (X の近くに Y がある) が使われる。所格所有 I は分離不可能所有の一部 (例：土地・建物) と抽象的所有 (例：時間、権利、力) にも使われ、ヒンディー語の普通の所有表現として使用の拡張が見られる。

次に、分離不可能所有 (INAL, IN/I) には属格所有 <X kaa Y honaa> (X のY がある) が使われる。多くの言語で属格所有は分離不可能所有を表す主要な手段になっており、ヒンディー語もこの通言語的な傾向にあてはまる。属格所有はまた、抽象的所有 (例：意図、関係、重要性) にも使われる。典型的な属格所有 (例：親族、身体部分) では、所有者と所有物の修飾関係 (一致関係) がなくなり、所有者の主題化が見られる。

病気や感覚、心理状態など、目に見えない無形の概念には与格所有 <X ko Y honaa> (X に Y がある) が使われる。与格所有は他に「時間」「権利」「習慣」など、もっぱら抽象的所有 (ABST) に使われる。

所有者に内在する特質・特性 (例：忍耐心、長所・短所) については所格所有 II <X mẽ Y honaa> (X (中)に Y がある) が使われる。<X mẽ Y honaa> は普通、存在構文として用いられるため、これを所有構文とみなすかどうかは重要な点であるが、本稿では所有のプロトタイプ特性や統語的振る舞いから判断し、これを所有構文として扱った。

本稿では、Heine (1997a) が分類した 7 種の所有概念のうち、ヒンディー語では無生物分離可能所有 (IN/A) を表すことができないことを明らかにした。

最後にヒンディー語に複数の所有構文が併存していることについて文法化の観点から考察を加えた。

以上、本稿ではヒンディー語の 4 つの所有構文を言語類型論の観点から分析・考察した。用例を集める過程で、先行研究に記述はないが、所有表現と考えられる以下の 2 つの構文が見つかった。

(57) X ke haath(ô) mẽ Y honaa

「X の手(の中)に Y がある > X は Y を持っている」 (Location Schema)

- (58) sab=ne vardii pahan rakh-ii hai aur
 全員=ERG 制服.F.SG 着る 置く-PFV.F.SG AUX.PRS.3SG そして
 sab=ke haathō=mē banduuqē hāī.
 全員=GEN.M.OBL 手.M.PL.OBL=LOC 銃.F.PL 存在する.PRS.3PL
 「全員が制服を着ており、銃を所持していた³⁴」 (BBC060607)

- (59) X Y rakhnaa
 「XはYを置く；保つ > XはYを持っている」 (Action Schema)

- (60) vah do moTrē rakh-taa hai.
 3SG 二 車.F.PL 置く;保つ-IMPF.M.SG AUX.PRS.3SG
 「彼は車を二台持っている」 (町田 1997: 340)

(57)は所格所有 III と呼ぶべき構文で、このタイプの構文を所有表現として用いている言語は他にもある³⁵。また、(59)はいわゆる have 動詞がないヒンディー語において、動作動詞を用いた他動詞文が所有構文に文法化していると考えられる重要な構文である。これらの構文が表す所有概念と使用条件の記述は今後の課題としたい。

〔注〕

- ¹ 本稿は麗澤大学言語研究センター第 41 回研究セミナー（「格と主題」プロジェクト中間報告、2008 年 12 月 11 日）において、「ヒンディー語における複数の所有表現」と題して口頭発表した内容に加筆・修正を施したものである。本稿の執筆にあたっては坂本比奈子先生、中右実先生から懇切なご指導とご助言を賜った。ここに記して謝意を表したい。なお、本研究は Heine (1997a: 117-134) のマンディング語 (Manding) とエウエ語 (Ewe) の事例研究に着想を得ている。
- ² have のほかに possess、own も使われる。中右 (1998: 83-4) によれば、この 3 つの動詞は守備範囲が異なり、融通性の幅に違いがある。own は文字どおり所有権 (ownership) がかわる場合にのみ使用可能のようにみえ、譲渡可能な所有を持ち分とする。譲渡不可能な所有は own の守備範囲ではないが、possess の許容範囲である。しかし、possess は have ほどには融通がきかない。
- (46c) He {has/??possesses/*owns} two nephews and a niece. (中右 1998: 84)
- ³ 「XはYをしている」(例：「彼女は青い目をしている」)を所有表現と見るか、単なる属性表現と見るかについては議論の余地がある。
- ⁴ インド・ヨーロッパ語族=インド・イラン語派=インド語派に属する言語で、インド中北部で話されている。基本語順は SOV で、名詞に男性/女性の区別がある。ヒンディー語には能格があり、述語動詞が他動詞完了分詞の場合にのみ能格構文をとる。
- ⁵ Heine (1997a: 76) は、ある言語表現がその慣習的な意味 (M₁) に加え、より抽象的で文法的な意味 (M₂) を受けるプロセスを文法化と呼んでいる。
- ⁶ “Possession is an abstract concept in that it is hard to define in non-linguistic terms. It is therefore not surprising that people use certain conceptual templates to refer to it.” (Heine 1997a: 76)
- ⁷ 以下、各スキーマの例を Heine (1997a: 47-67) から一つずつ挙げる。

- (i) *Action Schema*: Nama (Central Khoisan, Khoisan)
 kxoe. p ke 'auto.sa 'uu hââ.
 person.M TOP car . F take PERF
 'The man has the car.'
- (ii) *Location Schema*: Estonian (Finnic, Uralic-Yukaghir)
 isal on raamat.
 father.ADESSIVE 3.SG.be book.NOM
 'Father has (a) book.'
- (iii) *Companion Schema*: Portuguese (Romance, Indo-European)
 O menino esta com fome.
 the child is with hunger
 'The child is hungry.' (Lit.: 'The child is with hunger.')
- (iv) *Genitive Schema*: Turkish (Turkic, Altaic)
 Kitab-im var
 book-my existent
 'I have a book.'
- (v) *Goal Schema*: Tamil (Dravidian, Elamo-Dravidian)
 ena-kku oru nalla naay (irukkiratu).
 me-DAT a good dog is
 'I have a good dog.'
- (vi) *Topic Schema*: Cahuilla (Takic, Uto-Aztecan)
 né? ne-cípatmal qál
 I my-basket placed
 'I have a basket'
- (vii) *Source Schema*: Slave (Athabaskan, Na-Dene)
 ts'ét'ú nets'e.
 cigarette you.from
 'Do you (sg.) have cigarettes?'
- (viii) *Equation Schema*: Mandarin Chinese (Sinitic, Sino-Tibetan)
 Shū shì, wǒ-de.
 book be me-of
 'The book is mine.'

⁸ Heine (1997a: 10) は分離不可能として扱われやすい概念領域に、(a) 親族、(b) 身体部分、(c) 相対的な空間概念 ('top', 'bottom', 'interior', etc.)、(d) 他のアイテムの部分 ('branch', 'handle', etc.)、(e) 身体的・心理的状态 ('strength', 'fear')、(f) 名詞化 ('his singing', 'the planting of bananas', etc.) を挙げている。さらに、言語によって「名前」「声」「匂い」「影」「足跡」「土地」「家」なども分離不可能として扱われると述べている。

⁹ 中右 (1998: 83) はこのような NP-have-NP-PP タイプの構文に含まれる have を「存在の have」と呼び、「所有の have」と区別している。所有の have は possess や own に言い替えられるのに対し、存在の have は言い替えられない。

(49) a. John {has/*possesses/*owns} dirt all over his coat.

b. The table {has/*possesses/*owns} some maps on it. (中右 1998: 86)

なお、存在の have の主語は無生物とは限らず、(49a)のように有生物にもあてはまる。

¹⁰ Heine (1997a) にもヒンディー語に関する記述が若干あり、Freeze (1992) の例文が引用されている。

¹¹ Feature/Chapter 117: Predicative Possession (Leon Stassen).

Stassen は諸言語における所有権のある分離可能所有 (例: 'John has a motorcycle.') を対象とし (分離不可能所有や一時的所有は対象外)、そのコード化のストラテジーを

- Locational、Genitive、Topic、Conjunctive、‘Have’の5つに分類している。2009年1月現在の言語サンプル数は240(うちLocationalは48)である。
- ¹² 現在形では主語の人称・数に一致し、過去形では主語の性・数に一致する。
- ¹³ ヒンディー語ではこれら3つの所有概念を構文によって区別しておらず、その解釈はコンテキストや場面による。言語によっては異なる構文が用いられる。例えばブルガリア語 (Bulgarian) では、物理的所有と一時的所有は Location Schema に基づく構文で表され、永続的所有は Action Schema に基づく構文で表される (Heine 1997a: 232)。
- ¹⁴ 2人称代名詞の敬称 aap を除く。
- ¹⁵ ヒンディー語では複数形を用いることで尊敬表現になっている。
- ¹⁶ 所有者が無生物の所有。無生物分離不可能所有 (IN/I) と無生物分離可能所有 (IN/A) を指す。
- ¹⁷ アジアの言語では、トルコ語 (Turkish)、パシュトー語 (Pashto)、インド語派の諸語 (パンジャブ語 (Punjabi)、グジャラート語 (Gujarati)、ベンガル語 (Bengali)) などに属格所有が見られる。古典語であるサンスクリット語 (Sanskrit) でも叙述所有は主として属格構文で表される (Bauer 2000: 173)。
- ¹⁸ 属格後置詞 kaa はサンスクリット語の動詞 *kr* (する) の過去分詞 *krta* に由来する (*krta* > *kriya* > *kiya* > *kaa*)。この形容詞的な起源のため、kaa は後続する名詞の性・数・格に応じて形容詞と同じ変化をする (Montaut 2004: 64-65)。

属格後置詞 kaa の語形変化

	男性		女性	
	単数	複数	単数	複数
直格	kaa	ke	kii	
斜格	ke		kii	

- ¹⁹ (日本語訳のように) 形容詞文の場合、acchii (良い) と khyaati (評判) の語順が入れ替わる。この場合、honaa は存在動詞ではなく、コピュラ動詞として機能する。
- (i) us=**kii** khyaati acchii hai.
 3SG=GEN.F 評判.F.SG 良い COP.PRS.3SG
 「それ(地球)の評判は良い」
- したがって、(25)は属格所有文である。
- ²⁰ この文は「彼(が所有するところ)の本がたくさんある」という存在文にも解釈できる。
- ²¹ 「別の観点から見ると、この所有傾斜は、所有者と所有物の間の物理的なまたは心理的な近さ・密接さの程度を表していると言える」(角田 1991: 119-120)
- ²² ヒンドゥー教聖典の一部をなす文献。
- ²³ この文法現象はヒンディー語の周辺言語であるグジャラート語にも見られる (Masica 1991: 360)。
- ²⁴ 2つ目の ke は直格の ke (M.PL) と同形であり、laRke (M.PL) に一致させても変わらない。
- ²⁵ この ke に関する記述は多くの先行研究に見られるが、どのような所有物に用いるかについては研究者により見解が異なる(親族については全員が一致、身体部分については半数ほどが使われるとしている。Agnihotri (2007: 190) は友人関係にまで拡張して使われ、Kachru (1980: 122) は有生物(動物)にも使われると述べている。
- (i) maataadiin=**ke** do gaaē hāi.
 マーターディーン=GEN.M.OBL 二 牛.F.PL 存在する.PRS.3PL

- 「マーターディーンは牛を二頭持っている」 (Kachru 1980: 122)
- ²⁶ Heine (1997a: 110-117) はハンガリー語 (Hungarian) や口語ヘブライ語 (colloquial Israeli Hebrew) を例に挙げ、所有構文の発達と他動詞化 (transitivization) について論じている。
- ²⁷ 与格構文の例
- (i) raam=**ko** gussaa aayaa.
「ラームに 怒りが 来た > ラームは頭に来た」
- (ii) **mujhe** nīd aa rahii hai. (mujhe は mujh=**ko** (1SG=DAT) が一語化した形)
「私に 眠気が 来ている > 私は眠い」
- (iii) vah film aap=**ko** kaisii lagii?
「あの映画は あなたに どのように 感じられたか > あの映画はどうでしたか」
- (iv) un sab=**ko** baRaa kaST huaa.
「彼ら 全員に 大きな 苦勞が 生じた > 皆が大変な苦勞をした」
- 与格構文では aanaa (来る)、lagnaa (感じられる; 付く)、honaa (生じる; 起こる) などの自動詞がよく使われる。
- ²⁸ フランスの「公立学校における宗教的シンボル着用禁止法案」(2004年9月施行) に対するシク教徒の抗議の声。
- ²⁹ Montaut (2004: 205) は所格所有 I と II を合わせて ‘contingent and non-contingent possession’ と呼んでいる。
- ³⁰ 例文の [] 部分は非定形の従属節であるが、主語である viires が削除されている。
- ³¹ 分離不可能として扱われやすい概念領域 (注 8) には具体物と抽象物が混在しているが、分離不可能所有と抽象的所有を区別するためには、より精密な定義が必要である。
- ³² “A construction that includes inalienable and abstract possession among its meanings is likely to be old, since such meanings develop later than, for example, physical or temporary possession.” (Heine 1997a: 232-3)
- ³³ “Within a broad functional domain, new layers are continually emerging; in the process the older layers are not necessarily discarded, but may remain to coexist with and interact with new layers.” (Hopper 1991: 22)
“Layering is the synchronic result successive grammaticalization of forms which contribute to the same domain.” (Hopper and Traugott 2003: 125)
- ³⁴ インドでは兵士のほか、警官や警備員などが銃を持っているが、手に収まる拳銃ではなく、肩に掛けるタイプのライフル銃であることが多い。
- ³⁵ 複数の所有構文が同じスキーマから派生するのは珍しいことではない。例えばマンデインゴ語 (Mande, Niger-Congo) の4つの所有構文はすべて Location Schema から派生している。この言語では、bolo (手; 腕) や kùn (頭) のような身体部分名詞が所格後置詞に文法化しており、所有は「Y が X の場所にある」という構文で表される。「Y が X の頭にある」という構文は物理的所有に使われ、「Y が X の手にある」という構文は物理的所有、一時的所有、永続的所有、分離不可能所有 (親族は可、身体部分は不可) に使われる (Heine 1997a: 118-120)。

略号一覧

1,2,3=人称; AUX=助動詞; COP=コピュラ動詞; DAT=与格; EMPH=強調; ERG=能格; F=女性; GEN=属格; HON=敬称; IMPF=未完了; INDEF=不定代名詞; INF=不定詞; INST=具格; LOC=所格; M=男性; NEG=否定; OBL=斜格; PFV=完了; PL=複数; PRS=現在; PST=過去; REFL=再帰代名詞; Q=疑問標識; SG=単数 (グロスのハイフン(-)は形態素境界、等号(=)は接語境界)

用例出典

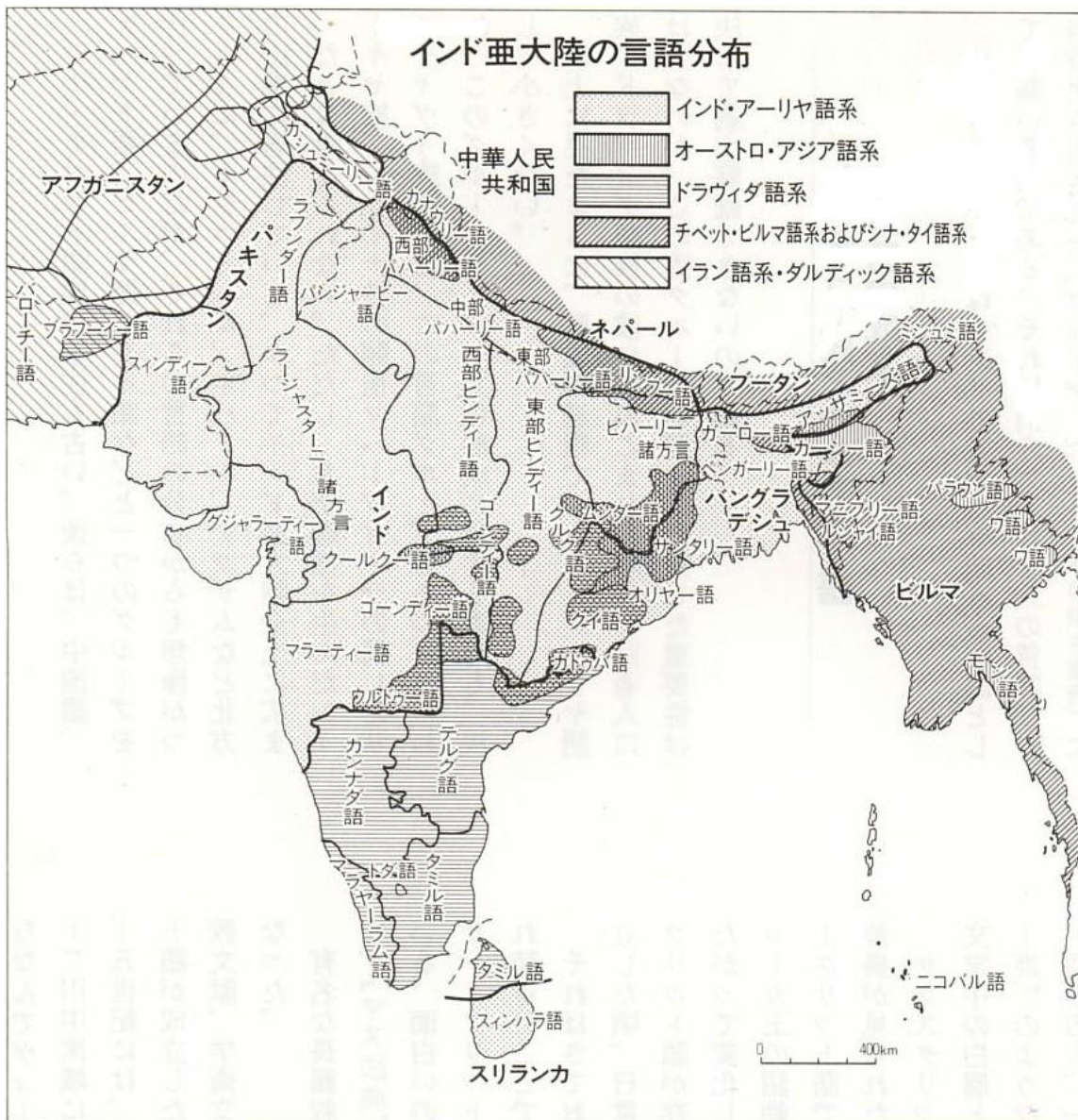
- Balbir, Jagvansh Kishor (trans.) (2004) *Chhota Rajkumar*. New Delhi: Hindi Pocket Books.
(Originally Published by Editions Gallimard 5, rue Sebastien-Bottin, Paris-7e (France)
in French language under the title 'Le Petit Prince' by Antoine De Saint-Exupery.)
- BBC: BBC Hindi (<http://www.bbc.co.uk/hindi/>)
- HJD: 古賀勝郎・高橋明 (編) (2006) 『ヒンディー語＝日本語辞典』大修館書店
Nandan. New Delhi: HT Media Prakashan.
- Rakesh, Mohan (2004) *Mohan Rakesh ki Sampurn Kahaniyan*. Delhi: Rajpal & Sons.
- Sahni, Bhisham (1989) *Pali*. New Delhi: Rajkamal Prakashan.
- Tiwari, Bholanath (ed.) (1985) *Vrihat Hindi Lokokti Kosh (A Comprehensive Dictionary of Hindi Proverbs)*. Delhi: Shabdkar.
- Vas, Gratian (1997) *Kahani Bharat ki--Bachchon ke lie*. Noida: Blossom Books.

参考文献

- アントワーヌ・ド・サンテグジュペリ (著)／小島俊明 (訳注) (2007) 『星の王子さま : 対訳フランス語で読もう 第2版』第三書房
- 坂田貞二 (採録・訳注) (1999) 『ヒンディー語民話集』大学書林
- 高橋 明 (2003) 「ヒンディー語の所有表現」『月刊言語』32 (11): 52-53、大修館書店
- 田中敏雄・町田和彦 (1986) 『エクスプレス ヒンディー語』白水社
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 中右 実 (1998) 「空間と存在の構図」中右実・西村義樹『構文と事象構造』、日英語比較選書 5、研究社
- 町田和彦 (1997) 『ヒンディー語動詞基礎語彙集』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- Agnihotri, Rama Kant (2007) *Hindi: An Essential Grammar*. London: Routledge.
- Bauer, Brigitte (2000) *Archaic Syntax in Indo-European: The Spread of Transitivity in Latin and French*. Berlin; New York: Walter de Gruyter.
- Bendix, Edward Herman (1966) *Componential analysis of general vocabulary: The semantic structure of a set of verbs in English, Hindi, and Japanese*. Bloomington: Indiana University Press.
- Bhatt, Sunil Kumar (2007) *Living Language Hindi: A Complete Course for Beginners*. Living Language.
- Freeze, Ray (1992) Existentials and other locatives. *Language* 68 (3): 553-595.
- Heine, Bernd (1997a) *Possession*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Heine, Bernd (1997b) *Cognitive Foundations of Grammar*. Oxford: Oxford University Press.

- Hook, Peter Edwin (1979) *Hindi Structures: Intermediate Level*. Ann Arbor: The University of Michigan.
- Hopper, Paul J. (1991) On some principles of grammaticalization. In: Traugott, Elizabeth Closs and Bernd Heine (eds.) (1991) *Approaches to grammaticalization*. Vol. 1: 17-35. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott (2003) *Grammaticalization*. Second edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jain, Sushama (2000) *Structures of Japanese and Hindi*. New Delhi: Har-Anand Publications.
- Kachru, Yamuna (1969) A note on possessive constructions in Hindi-Urdu. *Journal of Linguistics* 6: 37-45.
- Kachru, Yamuna (1980) *Aspects of Hindi Grammar*. New Delhi: Manohar Publications.
- Kachru, Yamuna (1991) Experiencer and Other Oblique Subjects in Hindi. In: Mahindra K. Verma and K. P. Mohanan (eds.) (1991) *Experiencer Subjects in South Asian Languages*, 59-73. Stanford, California: Stanford University.
- Kumar, Kavita (1997) *Hindi for Non-Hindi Speaking People*. Second edition. New Delhi: Rupa & Co.
- Masica, Colin P. (1976) *Defining a Linguistic Area: South Asia*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Masica, Colin P. (1991) *The Indo-Aryan Languages*. Cambridge: Cambridge University Press.
- McGregor, R. S. (1995) *Outline of Hindi Grammar*. Third edition. Delhi: Oxford University Press.
- Mohanan, Tara (1994) *Argument Structure in Hindi*. Stanford, California: CSLI Publications.
- Montaut, Annie (2004) *A Grammar of Hindi*. Muenchen: LINCOM EUROPA.
- Sinha, Binod K. (1986) *Contrastive Analysis of English and Hindi Nominal Phrase*. New Delhi: Bahri Publications.
- Verma, Sheela. (1997) *A Course in Advanced Hindi*. Delhi: Motilal Banarsidass Publishers.
- WALS (The World Atlas of Language Structures) Online: (<http://wals.info/>)

[資料] インド亜大陸の言語分布



出典：辛島昇 (監修) (1992) 『インド』 新潮社